二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

# いもうとサマーデイズ

## あえちゃんといっしょ

小説 山本沙姫
挿絵 シコルスキー

第一章　連発！　衝撃の告白　006
第二章　頼りないけど、頼りにしてよ　023
第三章　おまじないツインズ　063
第四章　黒くて長くてヌルヌルで……　116
第五章　ケーキよりも甘い夜　174
第六章　なかよし兄妹　248

# 登場人物紹介

Characters

## 緑川(みどりかわ) 奈津美(なつみ)

面倒見がよくしっかり者で、四姉妹をまとめる長女。生徒会に所属している。

## 緑川(みどりかわ) 楣(こずえ)

浩介に対して、勝気で反抗的な態度をとる次女。水泳部のエースで、巨乳。

## 緑川(みどりかわ) 夕菜(ゆうな)

浩介と同じ、生物部の後輩。おとなしく、あまり感情を表に出さない三女。

## 緑川(みどりかわ) まゆか

チアリーディング部所属の四女。夕菜とは双子だが、対照的に明るく元気な娘。

## 緑川(みどりかわ) 浩介(こうすけ)

父親の再婚により、四人の義理の妹たちの兄となった少年。魚オタク。

**『第二章　頼りないけど、頼りにしてよ』より**

グチュッ！

制止する兄の言葉に耳を貸さず、妹はみずから花園への扉を開いた。脈打つ亀頭に、ギュッと抓(つね)られたように締めつける感覚が伝わってくる。

「いっ、あはぁっ……あぁんっ！」

破瓜(はか)の瞬間、少女の下腹部を抉られるような鈍い痛みが走った。みずから突き立てた兄の一物はあまりに固く、そして太い。それでも彼女は、彼と一つになりたい、より深くつながりたい一心で大きな桃尻を左右にキュッキュッと揺すり、咥え込んだ肉の松明を処女の雫で染めながら己が膣内へと送り込んでいく。

「んんっ、ぁっ、あぁんっ……」

ジュルッジュブッズプズプッッッ……！

白くなだらかな下腹部を、僅かに膨らませながら進んでいく極太の肉槍。まるで、熟しきった桃の実を貫くような、ジュクジュクと湿って柔らかい感触に包まれる。同時に熱したコンニャクのような熱き肉壁が、周りからギュウギュウときつく締めつけてきた。

「あぁっ、しっ、締まる……すごく……あぁっっ……」

最も敏感な肉体の部位を湿った陰部で蹂躙され、掠れた声で思わず喘ぐ浩介。先端からエラの下、さらに胴まで徐々に強烈な膣圧の刺激と、粘り気のある蜜を纏った肉の花弁の熱さが降りてくる。そしてついに、女体の最深部へと到達する瞬間が訪れた。

「えいっ、あぅんっ！」
ビチュッ！
気合と共に、膝を大きく曲げる奈津美。固くいきり立つ肉棒がすべて収められ、互いの熱く湿った恥毛がカサカサと触れあう。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はっ、入りましたわぁっ。おっ、お兄様のが……わたしの、わたしの……中に……」
彼女は荒い息を吐きながら少し上体を後ろへ反らし、股間を突き出すようにして一物を咥え込んだ膣口を強調してみせた。
「あぅっ……」
黒い繁みの下で、ヌラヌラとぬめり気を帯びて輝きながら息づく赤貝のような秘唇に、赤黒く膨張した己が一物が突き立てられる。その姿があまりに淫靡で美しく目が離せない浩介は、思わず言葉を詰まらせる。水槽の水が回る音だけが、微かに響き渡る店内。その静寂が、再び破られる。
「えっ、えっと……それじゃぁ……」
全身汗まみれになりながら、奈津美がゆっくりと動き出す。
「んっ、んんっ、ふっ、ふぅっ、んんっ、あふぅんっ……」
ジュクッ、ジュグッ、ジプジプッッッ……！

兄の上で腕立て伏せをするように身を倒し、両手を床について腰を上下にくねらせる、つながりし妹。鈍い水音を響かせながら、擦れる秘所からジンジンと腫れあがるような痛みが走るのを堪える。少しずつ身体を慣らしていくように己が肉襞で、いきり立った兄のモノを擦り、磨いていく。

「どっ、どうです……お兄様。わたしの、中……気持ちいい、ですかぁんっ」

恥ずかしさに頬を染め、瞳を潤ませながら呼びかける奈津美。彼女に呼応するように、半開きの口から熱い吐息と共に抑えきれない快楽が、淫らな言葉となって飛び出してくる。

「すっ、すごいよ、奈津美の、中……熱くて……お、俺……溶けそうだ……」

まるで敏感な肉棒を、その下に走る神経ごと撫で回すような熱く柔らかな肉の感触。股間から静電気の如き痺れが脳髄まで何本も駆け抜け、頭の中が白くなっていく。

「うふっ、お兄様ったらぁ、そんなにハァハァしちゃって……食べちゃいたいぐらい可愛らしいですわぁ……」

頬を赤らめ瞳を固く閉ざした童顔の兄が、まるで年下のように可愛らしく見えた奈津美は、ついふっくらとした頬をまるで子供をあやすように撫で回し、耳元で囁く。

あたかも妖艶なお姉様が、いたいけな少年を誘惑するかのような口調で。

「あっ、そっ、そこ……すごいっ、あぅんっ！」

妹の誘惑ボイスに直接脳髄をくすぐられて、ますます興奮する浩介。まるで彼女に釣ら

れて子供に退行してしまったかのように、可愛い声で甘く喘いでしまう。
兄であるという立場を忘れて。
ブシュッ、ジュブッジュプッジュクッ……。
「ひゃぁんっ、わ、わたしのここ……おっ、おひぃしゃまので……グチュグチュに、グチュグチュになってぇへんっ、きっ、気持ち……ひぃぃんっっ！」
長い黒髪を振り乱しながら、兄の上で禁断の舞を踊る妹。さらなる快楽を貪ろうと、ただ上下に跳ね上がるだけでなく、桃尻で円を描くように腰を回したり、背中が床に届きそうなぐらい身体を反らして咥え込んだ一物を振り子のように左右に揺すったりと、次々に身体の動かし方を変えて膣内に収まった肉棒を揉み扱く。
ジャクッグシャッグシュッグショッグショッ……！
湿っぽい摩擦音を立てながら股間の肉襞で弄(いじ)くり回されるペニスが、まるでくすぐられているようにムズムズとして、生真面目な少年の心を惑わす。
「はぁうっ、はぅぁぁっっ……俺、どうにかなりそぅ……」
「あんっ、あっ、あぅんっっっ……お兄様ぁんっ、もっと、もっと……」
ズイッ、パチィッ！
感極まった腹上の妹は、みずからワンピースの胸元をはだけさせ、ブラのホックを荒々しく引き剥がした。押し縮められていた柔らかな乳房が勢いよく飛び出し、桃色の突端が

下から上へぐるぐると円を描くように激しく波打つ。
「おにひさまぁんっ、こ、ここ……触って……揉んでぇへんっ！」
床に広げたままのガッシリとした手を掴み上げ、奈津美は強引に自分の胸を揉ませる。太い指が白き柔肌に食い込み、真っ赤な手形を刻みつけていく。
「はぁんっ、なっ、奈津美の、オッパイ……柔らかくって、アソコも……はぁっ、と、溶けるぅぅっっ」
手の平に伝わるプリンを握りつぶしているような柔らかい感触の心地よさと、敏感な一物をゼリーのような肉襞でピタピタと撫で回される感触に酔いしれ、浩介の興奮は天井知らずに高まっていく。
ジュクッジュプッジュプッジュプッッッ……！
「はっはっはっはぁっっ！　んんっっっっっ!!」
「いいっ、おっ、お兄様の、おっ、オチン……チンっ、いっぱい……あぁんっ！」
はしたない声を上げて、乱れたワンピースの胸元や裾をパタパタとはためかせながら、寝転ぶ兄の下腹部の上で淫らに跳ね回り続ける長き黒髪の少女。熱さと興奮で朱に染まった足は見た目の細さに反して力衰えず、ひっきりなしに屈伸を繰り返して突き込んだ巨根を激しく前後に扱いていく。
ピシュッピシュッピシュッ！

腰を浮かせるたびに、膣口から愛蜜の雫が霧吹きのように撒き散らされる。魚の生臭さ漂う空気を、噎せ返りそうなほど大量の甘酸っぱい乙女の香りに染め変えさせた。

ただでさえ湿度の高い店内をさらに湿らせながら響く、外まで聞こえそうなほどの大きく淫らな水音と、二人の荒い呼吸音。夜明けまで続くかに思われた甘い背徳の時間。だが、やがて二人に限界の時が近付いてくる。

「おっ、俺……もぅ……でっ、出ちゃう……出しちゃうよっ……」

「おっ、お兄様ぁんっ、わ、わたし、もぅ、はっはぁっ、イッイッちゃぅぅっ、はじめてなのに……」

共に汗ばんだ喉を反らし、掠れた声で互いを呼びあいながら、心の中にメラメラと燃え立つ淫欲の炎に最後の瞬間まで快感の油を注いでいく浩介と奈津美。摩擦熱で真っ赤に染まった一物が、妹のヴァギナの中で携帯電話のバイブの如く小刻みにブルブル震える。そして先割れがググッと大きく開き、発射態勢が整った。

「もっ、もうらめぇんっ！　わたしひ、イッイッイッイクゥッ！　イッちゃうぅっっっ!!!」

「なっ、奈津美ぃっ、あぅっっっ……ぁあーっっっ！」

ブシューッ、ドクッドクッドクドクッッッッ！

肉棒の中を根元から先端に向けて、極限まで高められた愛欲が雪崩（なだれ）の如く駆け抜けて、二度目の精が少女の膣内で炸裂する。そして、収まりきらないスペルマが、つながった秘

肉の隙間から雨だれのようにタラタラと流れ落ちた。
「かはぁっ……」
はじめて味わった、本物のセックスの感覚。水仕事でカサついた自分の指なんかじゃない、時に強く、時に優しく己の分身を撫で回す女唇の感触を堪能し、その中で果てた気持ちよさに打ち震え、気の抜けたようなため息を漏らす浩介。だが同時に、そのため息には禁断の果実を食べてしまったことへの後ろめたさも込められている。
そして、下腹部にジンワリと広がる子種の熱さを感じ取った奈津美は、横たわる彼の上に覆いかぶさるように、パタンと倒れ込んだ。
「はぁんっ、おっ、お兄さまはぁんっ……」
兄の柔らかな頬に顔を押しつけ、甘い吐息をつきながら、彼女は囁きかける。
「わたしの中で、お兄様のことが……お兄様以上の人に、なってしまったみたいです……」
ずっと憧れていたお兄様と、すべてを捧げられる愛しき男性に同時に出会い受け入れられた喜びに打ち震え、少女は鼻を鳴らしながらいつまでも甘え続けた。
「奈津美……」
きっかけは半ば強引に押しきられたからだとはいえ、妹と許されざる関係を持ってしまったことに、生真面目な兄貴の心は大きく揺れ動いている。しかし今は、目の前で幸せそうな笑みを浮かべて甘えてくる彼女があまりに愛おしく、彼は逞しい腕で柔らかな身体を

ギュッと抱きしめた。
「あぁっ……お兄様ぁっ、もっと、強く抱きしめて……」
静かな店内に荒い呼吸音を響かせながら、長きにわたり燃え上がった余韻に浸りきる浩介と奈津美。しかしこの時、二人は気付いていなかった。
水槽の陰から覗き込む、六つの瞳があったことに。

## 『第四章　黒くて長くてヌルヌルで……』より

「ふぅっ、はぁっはぁっ、あふぅんっっっっ……」
膨張した一物が、たわわに実ったスイカの如き二つの乳房の間に挟まれ、揉みくちゃにされていく。かつて部室で着替え中、胸が大きいことに気付いた先輩から冗談半分でむりやり教え込まれたテクニックで、兄を翻弄する怒りの水泳少女。スイムスーツの布目に染み込む汗と粘液がプチュプチュと泡立ち、胸の谷間からクッキリと浮き出た臍まで垂れ落ちていく。
「ほらほら、妹にこんなことされて喜んじゃうなんて、恥ずかしいでしょう」
サディスティックな言葉の銃弾を浴びせながら、兄の一物を柔肌で揉み扱く水着姿の巨乳少女。豊乳の谷間に挟んだコンニャクのような男根が、徐々に固く、熱くなっていく。
「はぁっ、こっ、梢……だめっ、あぅっ……」
息も絶え絶えに、なんとか暴走する妹をなだめようとする浩介。しかし頭でだめだと思っても、心と肉体は男のシンボルを包み込む粘っこい刺激から逃れられない。心臓が滝の水音の如く激しく高鳴り、みるみるうちに男根が充血していく。
ネチュッネチュッチッ、ネチュッッッ……。
胸の谷間にたまった少女の汗と己が先走り、そしてウナギのぬめりが合わさって、柔らかな乳房を敏感な男の筋肉に吸いつかせ、淫音を奏でさせていく。
「あっ、はぁぁっっっ……」

ムキュッ！

耐えきれなくなったペニスが薄桃色から赤黒く変色し、血管を浮き立たせながら固く起立してしまった。

「まっ、ますます大きくなっちゃって……このっ、このこのぉっ！」

親の仇か何かを罵倒するように言い放ちながら、膨張した肉棒を指が食い込むほど強く握り締めた乳房で、下から上へ繰り返し何度も絞り上げる梢。しかし、怒りを纏った口調に反して胸に挟んだ一物を見る茶色の瞳には、愛しいものをウットリと見つめるような優しさが垣間見える。

「ごっ、ごめん……ゆっ、許して……あうっ！」

妹の強攻に何がなんだかわからなくなり、ただひたすら詫びる浩介。それでも敏感な一物にネチネチと絡みついてくる柔肌がもたらす、あの長女の肉花にも似た甘美な刺激に引きずり込まれていった。滑らかな皮膚の下を走る神経を、直にくすぐられているような、ジワジワとむず痒く心地よい刺激が、股間から尾てい骨のあたりへ突き抜ける。そして、そこから背筋を抜けて全身へビリビリと広がっていく。

ヂュプッヂュブッヂュブッヂュブブッッッ……。

「ほっ、ほらほらぁっ！　あたしの胸で、はぁっ、感じちゃってるんでしょう⁉　はふっはぅっ、出したいんでしょう！　出しなさいよぉっ‼」

吐息混じりの金切り声を上げながら、少し呆けたような表情で兄の一物を揉み扱くスピードを上げていく、巨乳のスイマー娘。速さだけでなく、押しつける圧力を上げたり、乳首を裏筋になぞるように這わせたりと様々な手段で、彼に恥ずかしい瞬間を迎えさせようと懸命に責め立ててくる。

「でっ、できないよ……そんな……んんっ……」

顔を真っ赤にして、必死に妹からの淫らな攻撃に耐える浩介。しかし、スベスベの布地を介して押しつけられる、ゼリーのようにプルプルとした乳房の気持ちよさに身も心も縛りつけられ、抜け出せない。

亀頭が充血してパンパンに膨らんでしまい、先端のスリットが大きく開いて、いつ暴発してもおかしくはないところまで追いつめられていく。

「はあっ、はぁっ、はぁっ、はぁっっっっ……」

頬を紅潮させ、半開きの口から漏れる生暖かい吐息が先割れに当たり、固く起立した一物の中を先端から根元まで一気に駆け抜け続け、さっきのウナギのように激しくブルブルと震えた。もはや、射精の時は目前まで迫っている。

「んっ、くぅぅっっっ……」

しかし、かろうじて残った理性が枷となり、兄は妹に白濁液をかけまいと固く目を閉ざし、股間に力を込めて踏ん張る。だが、それは薄氷の上に立つような危ういものだった。

競泳水着から湯気が上がるまで火照るほど、揉みくちゃにされる巨乳で扱かれる一物は陥落寸前なのだ。
「はぁっはぁっはぁっ……はふぅっ！　はぁぁんん」
追い討ちをかけるように、開いた先割れに浴びせられる熱い息が、中をブルブルと震わせる。そして、発射スイッチを入れるように、水着の表面まで浮き出た乳首が、左右から同時に裏筋を挟み込んだ。
「だっ、もっ、もぅ……でっ、出る……はぁうっっっ……」
「きっ、きてぇ、かけてぇ……浩介ぇえええーっっっっ！」
ドビューッ！　ドプッドプッドプッドプッドプッッッッッ……。
ついに、耐えきれなくなって噴き出してしまう、白き淫欲のマグマ。鼻腔にツンと刺さる消毒液のような刺激臭を漂わせながら、胸元や、恥ずかしさで朱に染まった茶髪少女の顔面を直撃する。身体中に浴びた精液が、いくつもの筋になって床までタラタラと流れ落ちていった。
「あ……こっ、浩介の……匂い……」
吹きつけられた生暖かいスペルマに手を触れながら、気が抜けたようにガックリと肩を落とす梢。しかし、目元を綻ばせて、口を半開きにして熱い息をハァハァと吐くその表情には、どこか嬉しそうな気配があった。

## 『第五章　ケーキよりも甘い夜』より

成長過程の少女特有の、儚い美しさと色気が漂い、床の上から眺める兄のつぶらな瞳を引き寄せる。

「お願い、こっ、こっちも触ってぇんっ、お兄ちゃぁん……」

金切り声を上げると、まゆかは彼の両手首を掴んで、自身の胸元へ引き寄せて強引にミニマムなバストへ、汗ばんだ手の平を押しつけさせた。

「まゆか……」

両手いっぱいに、焼きたてのホットケーキに触れたような熱くフワフワとした心地いい感触が広がる。自然と彼は、よりはっきりと彼女の胸の感触を味わいたくなって、十本の指をカニの足のようにワサワサと動かしはじめた。

未熟ながらも敏感な乳首から、胸いっぱいに静電気のような痺れが走る。

「ひぃっ……まゆか、まだおっぱいちっちゃいけど……いつか、梢ちゃんよりおっきくなってみせるから……今は……きゃんっ！　これで……勘弁してぇ……」

「ううんっ、そんなこと……まゆかの、胸……可愛くて、柔らかくて……いぃっ！　いいよぉ……」

胸の小ささにコンプレックスを持ち、兄を満足させられないと思い込んでいる妹を気遣い、彼は優しい口調で手に伝わる彼女の可愛らしいバストの感触を褒める。

ほとんど膨らみがなく未熟ながらも、まるでマシュマロのように柔らかい乳房の触感と、

トクントクンと激しく脈打つ胸の鼓動。それに、指を押すたびに上がる、小鳥の囀りのように可愛らしい喘ぎ声が、生真面目な兄から理性を剥ぎ取り、性欲を剥き出しにさせていく。

「だから、ほら……あぅっ！」

まるで、彼女の肉体で興奮していることを誇示するかのように、彼は激しく腰を突き上げる。ただ上下に振るだけでなく、時折尻を床から突き上げながら円を描くように揺り動かしたり、ジグザグに振りながらゆっくりと持ち上げたりと、様々な動きを繰り出す。

振り回す一物で味わう妹の膣内の感触は、まるでハチミツをタップリと染み込ませたスポンジケーキをかき回しているようだ。

さらに、膝を立てて彼女の小さなヒップに当てて、そのプリプリと柔らかな感触も味わっていた。

ズジュッズジュッジュブッジュブッ！

「あぁっ、いっ、いいぃぅ……お兄ちゃん、浩介お兄ちぁゃん。お尻も、おっぱいも……あっ、あそこも……みんな……あぁんっ！」

華奢な軽い身体を、天井まで飛ばされてしまいそうなぐらい突き上げられながら、つながった秘所の中を蠢く熱き巨根の感触に喜び悶えるツインテール少女、まゆか。汗と愛液、それに兄が滴らせる先走り汁で滑りがよくなったおかげで痛みが引き、ジワジワと痺れる

ような心地よい感触が下腹部を覆いはじめていく。
だが、愛する兄と結ばれる末っ子を、姉たちが黙って見ていられるはずがない。
「あっ、あの……お兄様。その、お願いが……あるんですけど……」
両手を胸の前で祈るように合わせて、甘ったるいおねだり声でたどたどしく話しかけてくる奈津美。彼女は、スカートの中に手を突っ込んで、白いショーツをスルスルと脱ぎ捨てる。そして、裾を摘んで大きく捲り上げ、下半身をさらけ出した。
さらに、兄の下腹部の上に乗って喘ぐ妹に背を向ける形で彼の頭を跨ぐように膝立ちする。そして、股間の繁みを鼻先に押しつけるようにゆっくりと腰を下ろしていく。
（奈津美……）
目の前で横たわり、妹の中を極太の男根で蹂躙して喘ぐ兄を求めて、甘い蜜を垂らす乙女の泉が蠢いている姿が微かに見えた。黒い芝の隙間から覗く紅色の肉花と、鼻を突く甘い蜜の香りに興奮し、邪魔物をかき分けてもっと奥を見たい、そして、乙女の汁を啜りたい衝動に駆られる。
心臓が高鳴り、のぼせたように頭がぼやける彼の耳元に、か細い声が聞こえてきた。
「まっ、まゆかから聞きましたわ。わっ、わたしも……ここを、大事なところを……舐めて、欲しいですぅっ」
「えぇっ！　何で……そのこと……」

三人だけの秘密かと思っていた、学校での秘め事を長女が知っていたのに驚き、素っ頓狂な叫びを上げてしまう浩介。あの日、末妹の手に貼られた湿った絆創膏から彼のスペルマ臭を嗅ぎ取っていた彼女は、その後で密かに、あの保健室での出来事を聞きだしていたのだ。

無論、彼が妹たちの秘所に舌を這わせたのも、彼女の知るところである。

「ひゃぁんっ、そっ、そぅ……そんな風に……あむぅんっ！」

股間に浴びせられた大声に、秘唇がブルブルと震える刺激を感じて、長い黒髪を振り乱しながら喘ぐお跨ぎ娘。ピチュッと、透明な雫がまるでテッポウウオの水吹きのように飛び出した。

「うぷっ！」

低い鼻筋を直撃する潮がスタートの合図となって、浩介は反射的に目の前で愛撫を待つ女唇に、荒れた唇を押しつける。そして、赤き舌を長く伸ばして湿ったジャングルをかき分けていくと、先端が幾重にもたたまれた肉襞の奥に潜む桃色の真珠に達する。

「ふわぁぅっ！」

自分で触れたことのない部位まで舐められて、股間の奥底に線香花火を押しつけられたような刺激がパチパチと走ると、少女はさらに大量に快感の雫を垂らす。

「んくっ……」

プチュップチュップチュップチュッ……！

張りついた口元から、湿っぽい淫音を奏でながら、彼は溢れ出る妹の甘酸っぱい蜜を無我夢中で啜った。

「あぁっ、そこ、そこそこー……もっと、あんっ！」

最も敏感な女性の部位に走る、ザラついた舌の感触。脈打つ熱き極太の肉杭を突き込まれた時とは違う、ぬるま湯で湿らせたヘチマで擦られるように生暖かく、そしてピリピリと痺れるような快感が、稲妻のように胎内を駆け抜けて子宮までゾクゾクと疼かせる。

「うんっ、なっ、奈津美の……ここ……美味しい、ょぉっ！」

「あんっ、すっ、素敵、素敵ですぅっ！　お兄様はぁんっ、あぁんっ!!」

溢れ出る蜜を啜りながら、まるで女唇に語りかけるかのように喘ぐ浩介。舌の愛撫のみならず、掠れた声と共に吐きかけられる生暖かい息までもが快感となって、ますます股間を熱く濡らしていく。

だが、クンニリングスの快感に酔いしれる長女の前に、ソロソロと梢が忍び寄ってくる。Tシャツを首元まで捲り上げ、さらにブラまで外すと、彼女は自慢の腕力で姉を押しのけた。

「ちっ、ちょっと……なにするの！　梢ぇっ!!!」

珍しく金切り声を上げる姉を尻目に、乱入少女は横たわる兄に呼びかけた。

「ねっ、ねぇ……浩介にぃ……あたしのも、吸ってみて……」
口を、エサを啄ばむ魚のようにパクパクと開閉させながら喘ぐ浩介の上に、まるで柔道の「上四方固め」のように上から覆いかぶさり、梢は己が乳首を唇へと押しつけていく。愛しい兄に乳首を吸われて、気持ちよさそうに喘ぎまくる姉を見て、彼女も試してみたくなったのである。
巨大なプディングを落とされたようなプルプルと柔らかい触感と、少し甘酸っぱさを感じるスポーツ少女の汗の匂いが顔面を覆い、仰向けで喘ぐ少年をさらに興奮させた。
「んんっ、梢……」
唇にペタペタと貼りつく、汗で湿った柔肌の心地よさに負けて、彼はみずから口を開いてしまう。コリコリと固くしこった乳首を愛蜜でベッタリと湿った口で吸い寄せ、舌を這わせ、そして軽く歯を立てた。
「ひぃっ！　ど、どう？　奈津ねえより大きくて……柔らかい、でしょ、でしょ??」
甘噛みされた紅色の突起から走る、電気ショックのようにビリビリとした刺激に、背筋を震わせて喘ぎながら、胸の大きさを自慢げに語る巨乳妹。さらに彼女は背筋をグッと伸ばして、自分の顔を兄の胸元に近付ける。
「んっ、ぱぷぅっ！　んくっ、んっんっんっ……」
シュクッシュクッチュプッチュプッッッッ！

固い胸板や鮮やかな紅色の乳首にチュッパチュッパと湿っぽい音を立てながら吸いつき、舌で火照った肌を舐め清めていく梢。柔らかい乳房で、彼の顔にHなマッサージを施しながら、彼女は兄の白き肌に無数の小さな椿の花を咲かせていく。

「わっ、わたしも……」

姉と妹が愛する兄に奉仕していく姿を見て興奮した夕菜が、再び参入してくる。縞模様の下着を足首までずりおろすと、末っ子の胸を揉む筋肉質な左腕を奪い取り、股の間に挟み込んだ。

「あ……」

まるでできたての温泉卵を落とされたように熱く、そしてジットリと湿った感触が腕中にゾワゾワと広がっていく。

「にっ、兄さんの……手……手も、気持ち……いぃ……」

白くか細い身体を反らし、股に挟んだ腕に鉋掛けするように腰を前後にスライドさせる夕菜。激しい動きに釣られて、長いおさげ髪が強風に煽られる柳の枝のように高く跳ね上がる。

ジュンッジュンッジュンッ！

動きに耐えきれずワンピースの肩紐が緩み、お腹のあたりまでずり落ちきて、さらにブラジャーのホックまで外れてしまった。白くなだらかな背中や、双子の妹と寸分違わない

小ぶりなバストが飛び出し、腰のスライドに釣られて極々僅かにプルンプルンと揺れ動く。
「はぅっ、はぁっ、はぁっ、はぁぁっっ……」
小さな手の平を両胸に当てて、細い指でみずから切ない胸を慰めるおさげ娘。本当は彼の右手も引き寄せて触らせたいが、自分と同じ小さな乳房を揉まれて気持ちよがるまゆかを思い、そこまではできなかった。
だが、いつもは妹たちを気遣っている長女が我慢しきれずに末っ子の楽しみを奪ってしまう。三女の姿を真似て兄の右腕を股の間に挟み込み、股間の繁みで磨くように腰を前後に素早くスライドさせてきた。
グチュッグチュッジュグッジャググッッッ。
「あぅっ、いっ、いいっ……お兄様の、逞しい……腕……」
染み込んだ愛蜜が泡立ちながら、湿った陰毛が筋肉質な少年の腕を磨き清めるように、表面を車のワイパーの如き速さで素早く動く。
「あぁっ、なっ、奈津美、夕菜……」
右手から来る粘っこくザラザラした感覚と、左手のスベスベした浅い感触。次女の巨乳で視界を塞がれていても、彼には腕に纏わりつく湿った陰毛の感触で、どちらに誰が張りついたかわかった。
四方から妹たちに押さえられ、引き締まった肉体に愛のご奉仕を受ける、皆に愛される

逞しい兄貴。激しく絡みあう五人に、いよいよ限界が近付いてくる。
「まっ、まゆか……まゆか、壊れちゃう……壊れちゃうぅんっ。でも、いいっ、いいょぉ！　お兄ちゃぁん……」
ブシュップシュッブシュップシュッッッ！
熱く濡れた秘唇が擦りきれてしまうかと思えるほど激しく、挟み込んだ熱き肉の松明を磨き上げていく幼顔のツインテール娘。ドロドロと溶けてしまうかと思えるほどの粘っこい熱さが、膨張した肉棒を表皮から芯まで隈なく包み込む。
「お、俺も……もう、もぅっ、でっ、出るうっ！」
彼女の声に引きずられるように、激しく腰を突き上げてラストスパートをかける浩介。まるで、柔道の受身の如くバンバンと打撃音が響くほど何度も臀部を上げ下げして、ビクビクと痙攣する一物で妹の中をかき回す。
「もっとお、もっとお……まゆかのこと、めちゃめちゃにしてへぇっ！　浩介おひぃちゃんっ!!!　あーんっっっ！」
「あぁっ！　いっ、いいよぉっ！　まゆか、まゆかぁぁぁーっ！」
彼が腰を浮かせるたびに、フランス人形のような白くか細い身体が跳ね上がり、長い髪と共に小さなヒップがプルンプルンと上下に揺れる。
「あんっ、なっ、何か……何かゾクゾクして……まゆか、どうにか……なっちゃいそう。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**